

《2022年7月（通算309回）公開サロン報告》

歯磨き感覚でスポーツは可能か？ (第2弾) -18年前の続きの話

土谷 享 (KOSUGE1-16/NPO サロン 2002 理事)
井関信雄 (スケートボードフォトグラファー)

【日 時】2022年7月19日(火) 19:30~21:30 (終了後はオンライン懇親会 ~23:30)

【会 場】オンライン (Zoom)

【テーマ】歯磨き感覚でスポーツは可能か？ (第2弾) -18年前の続きの話

【演 者】土谷享 (KOSUGE1-16/NPO サロン 2002 理事)

井関信雄 (スケートボードフォトグラファー) ほか

【参加者 (サロン 2002 ファミリー) 12名】★は NPO 会員

安藤裕一(GMSS ヒューマンラボ)、磯和明 (国立市総合型地域スポーツクラブ運営/少年サッカーコーチ/大人のフットサルコーチ)、北川信行 (産経新聞編集委員)、★熊谷建志、★小池靖、小松俊介 (筑波大学附属高校美術)、佐藤いちろう (靴郎堂本店)、★嶋崎雅規 (国際武道大学)、田中俊也 (救急医療センター)、★中塚義実 (筑波大学附属高校教諭/NPO サロン 2002 理事長)、★本多克己 (サロン 2002、神戸アスリートタウンクラブ)、本郷由希 (会社員)

【参加者 (サロン 2002 ファミリー以外) 5名】

井関信雄 (スケートボード写真家)、里村真理 (宇城市不知火美術館)、福地修也 (筑波大学附属高校保健非常勤講師)、三富章恵 (NPO 法人アーツセンターあきた)、宮城潤 (那覇市若狭公民館)

【報告書作成】天羽礼 ほか

【目次】

概要 (土谷享) -公開サロン案内より

I. 土谷氏の「いま」の取り組み

-台北子ども芸術祭における「PON-TAN 島」 台北パフォーミングアートセンター

II. 土谷氏と井関氏の「18年前」の取り組み

-ストリートで遊ぶ 墨田区向島/那覇市前島アートセンター

III. スケートボードフォトグラファーとしての井関氏の視点

IV. ディスカッション

【キーワード】

歯磨き感覚、遊び心、スポーツ、アート、
スケートボード、土谷享、井関信雄

概要（土谷享）－公開サロン案内より

2004年3月、「歯磨き感覚でスポーツは可能か？」をテーマに中塚義実と井関信雄によるトークが行われた。場所は当時東京都墨田区東向島にあったアートギャラリーの現代美術製作所だ。ギャラリーでは美術家ユニット KOSUGE1-16 によるアートプロジェクト「GUESS SPORTS ～楽しいスポ研～」が開催されていて、サロン 2002 のこの月例会は「GUESS SPORTS ～楽しいスポ研～」のイベントの一環としての位置付けでもあった。

グローバルなルールの中でのゲームを好まず、極めてローカルで個人的な行いであるスケートボードは、しかしその極めて小さく瞬間的な行いが世界中のスケーターの関心を引き付けるメイクにも転じる可能性を秘めていることが、スケートボードフォトグラファーとして既に一線で活躍していた井関氏の話から伝わってきた。

一方、世界共通のルールの中でゲームをし、常に上位レベルを狙う事もできるサッカー。中塚氏が筑波大学附属高校蹴球部監督として、またユース世代のサッカーリーグ DUO リーグのチェアマンとして見てきた景色は、スポーツが本来持っている“遊び心”とは程遠いユース世代スポーツの慣習であった。中塚氏はこの課題を解決するために「リーグ」「クラブ」といった概念を定着させようと奮闘していた。

あれから 18 年、ストリートカルチャーの一つの“遊び”だったスケートボードはオリンピック競技となり、メジャーな“スポーツ”へと変貌した。サッカーユースリーグは全国に普及したが、“遊び心”を取り戻すために導入されたサッカーユースリーグは義務的/事務的なものへと変わってしまった。この間、スポーツを取り巻く“遊び心”の所在はどのように変化したのか。

トーク当日は、演者の一人である土谷（美術家ユニット KOSUGE1-16・サロン 2002 理事）は、台北からの参加の予定。KOSUGE1-16 が台北で行っているアートプロジェクトと、その舞台となっている台北に新しくオープンした台北パフォーミングアーツセンターについても紹介する。また、昨年度開催した東京都現代美術館でのワークショップ「美術“じゃない”専門家との鑑賞会」についても触れる予定。このワークショップでは、美術じゃない専門家としてサロン 2002 理事長の中塚義実氏も講師として参加した。また、2002～03 年頃に行っていた KOSUGE1-16 と井関信雄、そして coda (DJ) とのアーティストコレクティブ「KosugeJCT.」の当時のプロジェクトも紹介する（この案内のメインビジュアルは KosugeJCT. による「那覇コース」(制作：2002 年)というアートプロジェクトより)。いずれのプロジェクトも“遊び心”をベースとして組み立てていると土谷は云うが、その狙いや変遷についても触れていく予定だ。

◎今年度から来年度にかけてサロン 2002 のトークやシンポジウムでは「遊び心の所在地」を探す旅をみなさんとさせていただきたいです。そのキックオフの公開サロンとさせていただきます。

< 関連リンク >

- ・2004年3月9日 月例サロン報告「歯磨き感覚でスポーツは可能か？」
https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2004/2004-3.pdf
- ・井関信雄
https://www.instagram.com/nobuo_iseki/
- ・KOSUGE1-16
<http://kosuge1-16.com>
- ・台北パフォーミングアーツセンター
<https://www.oma.com/projects/taipei-performing-arts-center>
- ・東京都現代美術館「美術じゃない専門家との鑑賞会」
<https://www.mot-art-museum.jp/blog/education/2021/12/20211116113547/>

I. 土谷享の「いま」の取り組み

ー台北子ども芸術祭における「PON-TAN 島」 台北パフォーミングアートセンター

土谷：土谷です。いま私は台北にいます。隣にいるのは、いま一緒にアートプロジェクトを進めているカイさん（台湾の落語家：開楽亭凡笑）。もとは建築、都市計画をされており、今日の話にもいろんな切り口で話してもらえそうです。今日のもう一人のスピーカーは井関くんです。

本題に入る前に、台北のプロジェクトを紹介します。

（画面共有開始）

大雑把に言うと、台北パフォーミングアートセンターの公式オープンに先立って、「台北子供芸術祭」が開催されており、そのプログラムのうちのひとつが「ポンタン島」です。子どもたちと一緒に、島に見立てた場所で、遊びの広場を一か月かけて作っていくものです。2か月間のプロジェクトですが、後半の1か月は、村長として台湾のアーティストを招聘し、私と異なるワークショップをしてもらい、最終日のPON-TAN フェスティバルを作り上げていくというプログラムです。

台北パフォーミングアーツセンターは士林夜市で有名な観光地近く駅前のシンボルにもなっています。子どもの芸術祭ということで、様々な空間を使ってパフォーミングアーツが開催されています。PON-TAN 島は、ここに設置しています。内側と外側の2重構造になっていて、内部のエリアがワークショップをするスペースで、一般公開しながら、我々はワークショップの準備を進めています。リサイクルペーパーや竹の材料、廃品などを使って作品を作っています。また、カイさんの落語と造形工作を結びつけたプログラムにも取り組んでいます。参加してくれる子供の年齢層は小学生でも低学年が多くて、ハサミやネジ回しなどの道具も積極的に使わせています。台湾の子どもたちは過保護に育てられている子が多く、体育の授業も必修ではないようで、身体を使った作品づくりの様子を見ると、身体感覚と概念が一致していない子が多いと感じます。

今回のコンセプトになったのは、王貫英という人物です。彼は、戦後、中国大陸から台湾に逃避してきて国籍を捨て、荒れもの拾いをしながら財を蓄えて図書館を開いたおじさんです。3年前からこの方のリサーチをしながら作品作りを進め、いろんな形で島に生かしています。

土谷：台北での取り組みについて何かご質問ありますか？

中塚：アートセンターは台北市内にあるんですか？

土谷：市内ですが、士林は少し郊外ですね。圓山飯店の裏側あたりになります。

台北パフォーミングアーツセンター

<https://www.oma.com/projects/taipei-performing-arts-center>

II. 土谷氏と井関氏の「18年前」の取り組み（土谷享）

ーストリートで遊ぶ 隅田区向島／那覇市前島アートセンター

土谷：では井関くんとやっていたアートプロジェクトや、18年前の歯磨き感覚の話に移ります。

・2004年3月9日 月例サロン報告「歯磨き感覚でスポーツは可能か？」

https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2004/2004-3.pdf

アートギャラリーは、新しいスポーツをつくるというコンセプトをもとに「スポ研」という研究施設を約1か月行った展覧会です。会場は向島。その中で、井関くんと中塚さんのトークが開かれました。当時、井関くんと私がどういう活動をしていたかということ、kosugeJCT.というグループを作って活動していました。kosugeJCT.の活動として、井関くんには一時的に私の家に引っ越してきてもらい、井関くんの家にスケボーパーク「ISEKIT-PARK」をつくるというアートプロジェクトを行ないました。集まった子どもたちと土手でサッカー大会に参加したりして、スケートボードだけでなく、外にも展開していきました。

その後、沖縄の那覇市で、宮城さんたちに声をかけてもらい、市場でのアートプロジェクトに参加しました。井関さんや私たちのまなざしで市場をリサーチした結果を作品にするというアートプロジェクトです。私は自転車、街に対する身体感覚を持ったスキャナーのようなイメージを持っていました。そのうちの 하나가、井関くんのスケートボードと繋がります。市場の段差に対する人々の工夫やアクションがありました。スケートボード、自転車、農家の一輪車をモニターとして市場を観察しました。市場は時間帯によって使い方が変わっており、深夜から明け方にかけては農家の方たち、昼間は日常の通行道として使われていました。そういったところを活用し、「那覇コース」と名付けさらにバリアフリーを勝手に読み替えたり拡張したりして、スケーターにもデモンストレーションしてもらったりして市場の使い方も拡張していきました。

土谷：宮城潤さん、います？

宮城：はい。いますよ。

土谷：宮城さんのことを少し紹介します。当時、前島という地区にあった結婚式場をアートセンターとしてリユースされ始めました。そういった場をつくったのが宮城さんです。宮城さんたちが企画された最初の国際アート展が「わなきおアート展」。その話をお聞かせいただけますか。

宮城：はい。前島アートセンターというところは那覇市内にあり、1990年ごろ暴力団抗争が激化して、高校生が銃で撃たれて亡くなってしまうという痛ましい事故があった物騒な地域です。その後さびれていきましたが、ビルのオーナーがどうにかしたいというので、そこを拠点に活動を始めました。街に対する見方を変えて、魅力や課題を顕在化しながら街に対してアプローチするという「わなきおプロジェクト」を展開していきました。

・NPO 前島アートセンター

<http://apm.musabi.ac.jp/imsc/cp/menu/NPO/MAEJIMA/intro.html>

Ⅲ. スケートボードフォトグラファーとしての井関氏の視点

土谷：ありがとうございます。18年前の話を振り返ってみると、まさかスケートボードがオリンピック種目になるとは思ってもいない話しぶりで井関くんが語っています。サッカーという、社会的にも認められたスポーツを、より豊かな環境でユース世代に提供してあげようという中塚さんの視点が、井関くんと化学反応している様子が報告書を読むと伝わってきます。スケートボードは都市の中に介入していくときに生じるハレーションや痛さという部分に遊び感覚があったように思うけど、オリンピック種目という公式競技になって、コーチがいて、練習する環境があったとき、スケートボードの“遊び心”はどのように担保されているのでしょうか？

井関：僕は基本的に、ストリートじゃないと自分の写真作品にならないと思っています。なぜパークで滑っているスケーターの写真ではないかという、街の中の階段や手すりを、自分たちの使えるツールに見立てて読み替えて、自分たちのチャレンジを記録したり、自分のスケートボードの価値観を表現するのが面白いと思っています。そこがスケーターの、アスリートとしてのスキルだけでなく、アイデアや発想、スケートボードの歴史をどのように踏まえて次の新しいことをやるのかということ、考えてみたらアートと同じです。スケートボードのフィールドを拡張していくような行為だと思っている。それを僕は記録していると考えています。

・井関信雄

https://www.instagram.com/nobuo_iseki/

土谷：オリンピック種目として認められ始めたとき、遊び心の重心はどんなふうになりましたか？

井関：野球やサッカーのようないまままでのスポーツとは異なり、アスリートというよりはヒッピーカルチャーに出所があり、そこを踏まえながらスポーツに寄せていったというのがいままでなんです。スケートボード自体が遊びだから、どういう風にスポーツとして採点したり共通のルール化していくのかというところが大変だったようですね。競技となってしまうと“遊び心”という感覚は難しいかもしれません。限られた競技時間（1分とか40秒）の中で自分のアイデアや持てる技術を表現するわけだけど、そこに一個でも二個でも他の人がやらない事とか、予想外の場所を使ってみたりとかっていうのを盛り込んでいくんだけど、めちゃくちゃ難しい。だから今の15歳前後のオリンピックとかにメインで出ている子とかは、日本では競技大会出場をやりつつ、めちゃくちゃ少ないけどガチのストリートでもビデオ撮影している。その両方をやっている。そこで自分自身のアイデアが育つから。でも今、ストリートの方は13~14歳位のポジションがガラ空きで、みんなオリンピック出たいという難しい方向に向かっていて、親子そろって海外を含む競技大会とかに参加するんだけど、上位に食い込むのが難しく、ストリートで写真撮っている私からすると、ストリートでやるのが今チャンスなんだけどなど思っている。だから若者にとっては“遊び心”というより、部活みたいな感覚でスケートを捉えてしまうでしょう。

土谷：なるほどね。18年前の報告書を読んでも、井関くんへの質問で、スケートボードもちゃんとしたコーチがつけば、技術も上がる。なぜそういう環境をつくらないのかというのがありました。自分でトライしていくことの面白さがスケートボードの醍醐味じゃないかという回答がほかの人からありました。そういう感覚をもったティーンエイジャーが少ないのかな？

井関：いや、そういう感覚はみんなありますね。基本的にコーチはいないから。

土谷：そうなんだね。じゃあ今度は競技としてのスケートボードではなく、カルチャーとしてのスケートボードについて聞きたい。昔はZINEなどを手作りして広めていたと思うけど、今の情報の流通ややりとりは変わってきているの？

井関：スケートボードって昔からビデオが歴史を作ってきたんです。80年代以前は映画の機材みたいなもので撮影していたから、限られたトッププロだけがビデオが撮れるっていう形だったんだけど、80年代にビデオの普及やハンディーカムの出現があり、もっとカジュアルに撮れるようになった。今はインスタ。2011年くらいから出てきて、スケーターは結構早く使いはじめて、そこで最新のトリックとか技とかみんなシェアする事が始まり、いまそれが主流。スケートボードと映像との親和性はとても高い。世界中のスケーターがインスタを使っているからそこがすごく効いていて、日

本のスケーターの技術も急に伸び始めた。インスタグラム以前は、斬新なトリックが世界中に知れ渡るの、早くて半年かかったけど、インスタの場合は撮ったら即座にシェアするから技術の伝達が早くなったね。スケートボードは新しい技術をシェアする文化なのね。それが日本人スケーターの技術の向上をめっちゃ早くした。これまでの10倍くらいは早いと思う。すごいSNSの恩恵を授かっていますね。

そういえば、この前ヨーロッパに行ったときに、スケートボードのスポットの紹介をしているSHINNERというアプリを知って、ヨーロッパのスケーターは結構使っている。同じようなアプリが世界にもう2~3個ある。

土谷：新しいテックを使いながらスケートの遊び心をしっかり反映しているね。

井関：概念も含めたシェアがなされてる。こういうのが“遊び心”だよな。

IV. ディスカッション

土谷：中塚さん、皆さんとのディスカッションをしたいということですが。

中塚：その前に私自身、いっぱい話したいことがあります（笑）。

まずはスケートボード絡みで。昨日テレビを見ていたら、たまたまスケートボードの紹介番組をやっていました。ストリートですごい技をして、そういう場面をスマホで撮って拡散し、ローカルヒーローになるのがスケートボードの文化なのだと感じました。サッカーの一流選手は大きなメディアで取り上げられますが、スケートボードの人たちはそういうところでアイデンティティを充実させているのじゃないかな。

もう一つ、日曜9時のTBSドラマ「オールドルーキー」で、スケートボードに取り組む小学生の話が取り上げられていました。その子は競技としてよりも、友だちと遊びながら新しい技に挑戦してスケートボードを楽しみたいと言っているのですが、父親はオリンピック選手にさせたがっているという話です。井関さんの感想を少し聞きたいのですが。

井関：そうですね。若いスケーターはスケートを楽しんでいただいただけなのに、親御さんが熱心に指導しちゃいがちですね。親も一緒にやったらいいのにとお思います。

中塚：ドラマの中の話ですが、その子は結局アメリカに移住することになりました。いまや小学生でも“志”があれば海を越えてどこへでも行ける。そこで自分と同じような“志”を持つ同世代と巡り合いたいという設定で。そういうことは実際にあるのだろうなとお思いました。

別の観点でもう一つ。スケートボードがオリンピック種目になり、すごく新鮮に感じました。勝敗を競い合い、メダル争いに特化しがちだった従来のオリンピック種目とは異なり、互いを高めあい認め合う姿が印象的でした。従来のオリンピック種目から“遊び心”が失われていることをIOCが感じ、スケートボードやサーフィンを導入したのかな？ 新しい風として、ポジティブに捉えてよいと思います。ただ、油断していると、スケートボードやサーフィンもガチガチな競技になっていきはしないかと危惧しています。今後見守っていききたいですね。

土谷：いまその話に関する質問が三富さんから来ています。三富さん、いますか？

三富：はい。昨年オープンした公共のアートセンター、秋田市文化創造館の管理をしています。

- ・秋田市文化創造館

<https://akitacc.jp/>

- ・指定管理者 NPO 法人アーツセンターあきた

<https://www.artscenter-akita.jp/>

高校生、大学生を中心に敷地内をスケートボードで滑り始め、その影響で施設が傷ついたり、冷や冷やする場面がありました。そこで、スケーターの方たちと話し合いを進めていると、町内会や市議会の方々も関心を持ってくれるようになりました。ストリートとしてのスケートボードのあり方については、世代によってグラデーションがある印象です。10代の子たちはスポーツとして技を極めたいと思い、それができる環境として専用のパークが欲しいと言っています。しかし30代、40代の方々は、スケートボードを始めたのはストリートだという思い入れがあるので、パーク整備だけではなく、ストリートにも魅力を見出しており、議論を継続しています。

井関：スケーターの方々にすごく寄り添った接し方をされているんですね。

三富：そうですね。この施設自体がいろんな活動や表現をサポートしていこうというスタンスなので、排除せずにどうしたらいいかを話し合っている。

井関：MACBA（マクバ）というバルセロナの美術館にあるスケートスポットご存じですか？ スケートボードの「ストリート」と「パーク」の中間的な考え方として「プラザ」という言葉があります。そういうものにすればたくさん人が来そうな予感がします。

- ・MACBA Museo de Arte Contemporáneo de Barcelona

<https://www.macba.cat>

今の時代、SNS にアップして共有する行為は、もっと個人的な面にフォーカスされている気がします。ティーンエイジャーの若い世代はスマホでビデオをとっていますが、身体感覚やコミュニケーションがはく奪されているような気がします。

中塚：公共空間を開放して自由にスケートボードを楽しんでもらうのはよいことだと考えますが、そこで事故が起きた場合の責任の所在は、という話がおそらく出てきているでしょう。必ずそういう話になります。「遊び」という言葉を使うなら、本気で遊んでいない人たちほど、事故があったときに自分以外に責任を求めます。「ちゃんと遊ぶ」とは、自己責任を理解したうえで遊ぶということです。“遊び心”、本当のスポーツマインドがわかっている人に来てもらわないと困るよね。

土谷：そろそろ時間なのでいったんこのあたりで締めますか。

中塚：そうですね。どうもありがとうございました。非常に興味深く、次につながる話になったのではないかと思います。またこの話の続きもやっていきましょう。時間のある方は、5分後に乾杯しますので、親睦会で続きの話をしましょう。

(続きはオンライン懇親会)